たぶん、好きだった（お題）

さなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たぶん、好きだった（お題）

【Ｎコード】
Ｎ３５０４ＢＡ

【作者名】
さなぎ

【あらすじ】
ブログのお題より。サイトにも載せてあります。
恋愛もののつもり。

（……あ）

あけましておめでとう。
たった一言、そう年賀状の端っこに書いてあった。
たった一言しか書いてないけれど、その文字はとても丁寧で、とても鮮やかな龍が天へと昇る絵が手書きで描かれていた。

ふ、と笑みをもらして年賀状を裏返す。
思った通り、それは二年ぶりに送られてきた、彼女からのものだった。

（……今どうしてんのかなあ）

綺麗に書かれた彼女の名前を見ながら、ふとそんなことを思う。
大して話したことはない。ただの中学のクラスメートだった。
唯一接点があったとすれば、テストの時、出席番号の関係で隣の席になるだけ。
かといって何か話すわけでもなく、挨拶を交わす程度だった。

彼女は美術部で、よく絵を描いていた。
目立つ性格でもなく、休み時間も自分からは動かない。
誰にも話しかけられなければ、静かに一人で絵を描いていた。

（……やっぱ綺麗だなあ）

年賀状をしばらく見つめて、心の中で呟く。
よくコンクールで賞を取っていた彼女の絵は、その度に廊下に飾ら

れていた。
その絵があまりにも綺麗で、何度も立ち止まってしまったのを覚えている。

中学1年の冬、皆が住所を聞いて回るから、それに便乗して彼女の住所を聞いた。
年賀状を送りたいから、という僕の理由を聞いて、彼女は何も言わずに住所を教えてくれた。
別に絵を描くのが好きな訳でもないのに、何故か一生懸命手書きで年賀状を書いた。
年が明けて暫くして、彼女から返事の年賀状が送られてきた。
彼女からの初めての年賀状は、手書きの色鮮やかな鼠だった。

それから中学を卒業するまで、年賀状を送った。
クラスが変わってしまったから彼女が送ってくれるか分からなかったけれど、毎年一生懸命手書きで書いた。
彼女からも毎年、手書きの色鮮やかな年賀状が送られてきた。
その度に年賀状を暫く眺めて、それから大切にしまった。

大して話したことはない。
たった一年、おんなじ教室の中にいて。
たった三年、時々廊下ですれ違う程度だったけれど。

僕は、彼女の絵が大好きで。
彼女のことが、たぶん　好きだったんだと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3504ba/

たぶん、好きだった（お題）

2012年1月9日01時53分発行